

【旧約聖書日課】イザヤ書 7章10～14節

10主は更にアハズに向かって言われた。

11「主なるあなたの神に、しるしを求めよ。深く陰府の方に、あるいは高く天の方に。」

12しかし、アハズは言った。

「わたしは求めない。主を試すようなことはしない。」

13イザヤは言った。

「ダビデの家よ聞け。

あなたたちは人間に

もどかしい思いをさせるだけでは足りず

わたしの神にも、もどかしい思いをさせるのか。

14 それゆえ、わたしの主が御自ら

あなたたちにしるしを与えられる。

見よ、おとめが身ごもって、男の子を産み

その名をインマヌエルと呼ぶ。

【使徒書日課】ヨハネの黙示録 11章19節～12章6節

11¹⁹そして、天にある神の神殿が開かれて、その神殿の中にある契約の箱が見え、稲妻、さまざまな音、雷、地震が起こり、大粒の雹が降った。

12¹また、天に大きなしるしが現れた。一人の女が身に太陽をまとい、月を足の下にし、頭には十二の星の冠をかぶっていた。²女は身ごもっていたが、子を産む痛みと苦しみのため叫んでいた。³また、もう一つのしるしが天に現れた。見よ、火のように赤い大きな竜である。これには七つの頭と十本の角があって、その頭に七つの冠をかぶっていた。⁴竜の尾は、天の星の三分の一を掃き寄せて、地上に投げつけた。そして、竜は子を産もうとしている女の前に立ちはだかり、産んだら、その子を食べてしまおうとしていた。⁵女は男の子を産んだ。この子は、鉄の杖ですべての国民を治めることになっていた。子は神のもとへ、その玉座へ引き上げられた。⁶女は荒れ野へ逃げ込んだ。そこには、この女が千二百六十日の間養われるように、神の用意された場所があった。

【福音書日課】 マタイによる福音書 1章18～23節

¹⁸イエス・キリストの誕生の次第は次のようであった。母マリアはヨセフと婚約していたが、二人が一緒になる前に、聖霊によって身ごもっていることが明らかになった。¹⁹夫ヨセフは正しい人であったので、マリアのことを表ざたにするのを望まず、ひそかに縁を切ろうと決心した。²⁰このように考えていると、主の天使が夢に現れて言った。「ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである。²¹マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである。」²²このすべてのことが起こったのは、主が預言者を通して言われていたことが実現するためであった。

²³「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。

その名はインマヌエルと呼ばれる。」

この名は、「神は我々と共におられる」という意味である。

あなたを歓迎します！【こども説教のために】

「待降節（アドヴェント）」の四本目のロウソクが灯りました。御子のご降誕を祝う週を迎えました。その週の初めの日曜日、皆が共に集められるときに、わたしたちはご降誕の祝いを始めましょう。ただ、世界中の教会がご降誕を祝うとき（12月24日夜＝クリスマスイブ）はまだですから、「降誕のロウソク」には火を灯さないでおきましょう。

「クリスマスおめでとう」と挨拶しましょう。御子のご降誕を最初に祝い、互いに挨拶し合ったヨセフとマリアのように、わたしたちも祝いの挨拶を交わしましょう。わたしたちもご降誕の祝いへと集められたのです。クリスマスの挨拶を互いに交し合うようにと集められてきたのですから、ヨセフとマリアのように互いに挨拶し合わないわけにはいきません。親しい者同士だけでなく、そうでない者とも、初めて見る人とも、祝いの挨拶を交わすのです。

ヨセフは、マリアに祝いの挨拶をすることができるか、不安でした。マリアから離れてしまおうかとさえ考えていました。けれども、主の天使が夢に現れて、励ましてくれたのです、「マリアを迎え入れなさい」と。勇気をもってマリアを迎えたヨセフは、マリアと祝いの挨拶を交わすことができたのです。二人の間に御子がお生まれくださったからです。

今日、わたしたちも、互いに迎え合いましょう。歓迎し合いましょう。わたしたちの間に御子がお生まれくださるのです。互いに祝いの挨拶を交し合うわたしたちの間で、御子、新しい命が、お生まれくださるのです。

「御子」を迎える

ご降誕の祝いのおときを、今年も迎えることができました。今年も、世界中で争いと災害が絶えることのない一年でしたが、それでも、わたしたちは、この祝いのおときを迎えることができたのです。

ここに皆さんをお迎えできることは、どれほど喜ばしいことでしょうか。毎年、クリスマスを迎えるために、教会は多くのご案内を発信するのです。教会の皆さんにも、チラシとハガキのご案内を託してきました。最近では、インターネット上でも宣伝しています。けれども、それがどれだけ届いているのでしょうか。世界中の教会が発するクリスマスの案内は、世界中に溢れる膨大な情報の海の中で、小さな雫となって埋もれてしまっています。

一昔前まで、クリスマスは、子どもたちにとって待ち焦がれるときでした。若者たちも、大人も、子どものようになってクリスマスを待ち侘びていました。クリスマスには、誰もが子ども時代を思い出させられるような、懐かしくも輝かしい魅力があったのです。そのような魅力は、色褪せてきてしまったのでしょうか。

たとえそうだとしても、わたしたちは、クリスマスの祝いのおときを迎えました。皆さんを、この祝いにお迎えすることができました。

どなたのことも歓迎します。教会は、いつも、どなたのことも歓迎していますが、クリスマスほど歓迎の手を広げるときはないでしょう。たとえ皆さんがどんな思いを心に抱きながらここにおいでになられたのだとしても、お迎えした皆さんを歓迎いたします。「御子」をお迎えするように、皆さんを歓迎いたしましょう。

クリスマスは、一人の男の子の誕生を祝う物語を聞くときです。

「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。」

およそ生まれてくる子どもの半分は、男子です。何も珍しいことはありません。それどころか、生まれてきたばかりの子が男子であったからと言って、何か特別なところがあるのでしょうか。いずれ成長すれば、男子は男子らしく、女子は女子らしくなるかもしれません。もちろん、そうならないかもしれません。誕生したばかりの子が、何者であるのか、将来、何者になるのか、いったい誰に分かるでしょう。

それでも、生まれてきた子を迎えるのです。何者でもない者として、生まれてくる子は、迎えられるます。

クリスマスにご降誕を祝う御子を、わたしたちは、まだ何者でもない者として、お迎えするのです。母や父の胸に抱かれるしかない、何者でもない赤子。それが、クリスマスにお迎えする「御子」です。わたしたちがクリスマスの祝いの中でお迎えする「御子」です。

「イエス」と名付ける

ヨセフは、「御子」を宿したマリアを迎えました。

二人は婚約していましたが、**一緒になる前に、聖霊によって身ごもっていることが明らか**になっていたのでした。現代人であれば、気にするようなことでもないのかもしれませんが、ヨセフは躊躇しました。結婚生活を始める前に「御子」を宿したマリアを迎えてよいものか、迷ったのです。いいえ、はっきり言って、**ひそかに縁を切ろうと決心**していたのです。

それでも、ヨセフは、マリアを迎え入れました。主の天使が夢に現れたからです。「御子」が**聖霊によって宿った**と信じたからです。その「御子」を迎えるために、ヨセフは、マリアを迎え入れました。マリアを迎え入れることなしには、「御子」を迎えることはできないからです。

クリスマスの祝いへと呼び集められて来られた皆さんは、今日、お生まれになられた「御子」をご覧になることをお望みでしょう。「御子」のご降誕を祝うために、クリスマスの祝いへと馳せ参じたのです。初めて教会のクリスマスにおいでの方も、きっと、ここでご降誕を祝われている「御子」をご覧になりたいはずです。あの、天使たちの知らせを聞いて馳せ参じた羊飼いたちのように、星の導きによって訪ね当てた占星術の学者たちのように、「御子」を一目見たいと願われていることでしょう。

その「御子」は、皆さんの間に宿られています。皆さんの中に、宿られています。互いを迎え入れる者の間で、「御子」は宿ってくださっています。そして、「御子」は、新しい命は、そこで誕生するでしょう。互いを迎え入れる者たちの間で、今日、新しく生まれ出てくださいるでしょう。

その新しい命が、「御子」が、一体何なのか、何者なのか、わからなくて当然です。まだ、何者でもないのですから。けれども、「御子」は、確かに生まれてくださるのです、わたしたちの間で。互いを迎え入れる者たちの間で。

その生まれたばかりの命を、小さな命を、「御子」を、受けとめましょう。この命は、一人で引き受けるものではありません。互いに迎え入れ合う者たちが、共に引き受けるのです。共に育むのです。小さな生まれたばかりの命である「御子」を迎え入れて、共に育てていくのです。

この「御子」に、名を付けましょう。わたしたちが共に迎えて、共に育む命に名を付けましょう。何者でもないこの命に名を付けて、この「御子」が互いに迎え入れ合う者たちと共にあることを、忘れないようにしましょう。

「**その子をイエスと名付けなさい**」。天使がヨセフにそう告げたように、わたしたちも、この命の「御子」を「イエス」とお呼びしましょう。「御子イエス」とお呼びしましょう。まだこの「御子」が何者であるかを知らなくても、今日わたしたちの間で生まれた新しい命を、そう呼ぶことにいたしましょう。